

# 博物館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡 / 湯之奥・中山金山

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館報



1万人目の石河さん（愛知県）



2万人目の榊さん（茨城県）



3万人目の大木さん（静岡県）



4万人目の渡部さん（神奈川県）



5万人目の松本さん（東京都）



6万人目の大塚さん（山梨県）

## もうすぐ有料入館者7万人目を迎えます

今日現在で、68,826人となりました。どなたを7万人目のお客様としてお迎えするか楽しみです

今年は世紀またぎの年ということもあって、世の中はいつにも増して慌しい年明けだったように感じられますが、みなさんそれぞれに晴れやかな新年を過ごされたことでしょう。

開館3年目を迎えた昨年の1年間は、遺跡見学会や公開講座などの毎年恒例の事業に加えて、玩具作り教室、親子映画会、公開講演会（産業考古学会鉦山金属分科会及び町教育委員会と共催）など、今回初めて催したという事業も幾つかありましたが、各方面の方々からのお力添えもいただき一応の成功を収めることができ、そういった意味では実りある1年でした。そんな長いようで短く、短いようで長い1年が過ぎ、2001年を迎えることとなりましたが、新たに気持ちを引き締めて、皆様に満足していただける施設づくりを目指してまいりますので、今年も変わらぬ御指導・御協力をお願いいたします。

# 湯之奥3金山は、日本で最初の山金採掘金山です

下部町民の皆様が自慢できる『歴史遺産』です

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館 館長 谷 口 一 夫

昨年は「文化財」のイメージが大きく損われる事件が宮城県や山梨県で起きてしまいました。

その一つ宮城県の上高森遺跡における「旧石器発掘ねつ造」事件は、よもや誰もが考えもしなかった行為で嘔然としましたが、大きな救いはこの事実が発覚し報道されたことで「日本の歴史が守られた」ということです。

もし、ねつ造が発覚しなかったらどうなっていたのか、旧石器研究が出口のない袋小路へ突き進むことになるばかりか、日本の歴史像全体に大きな影を残すところだったわけです。本県では、この事件が冷めやらぬ内に「甲府城稲荷櫓の礎石」と「本丸櫓の礎石」紛失問題が起きてしまいました。

この方は、山梨県指定史跡「甲府城」の公園整備事業で、それに伴う事前の発掘調査を行いながら、詳細な発掘記録を残しつつ整備事業（石垣、櫓門、築地塀などの復元を含む）が進められてきましたが、既に大方の整備は完了し、平成の大改修の威容が現れて参りました。今、その最終段階の「稲荷櫓」建設を巡っての検討が進められている段階にあります。

この間、発掘調査によって、未解明だった甲府城の真の姿が次から次へと県民の前に提供されてきました。最終的には「甲府城跡発掘調査報告書」で、どういう、歴史事実があったか公開されます。ここで起きた問題は、発掘調査で確認できた「礎石」を紛失するという、管理面での失態を犯してしまったわけです。宮城県でのねつ造と違い、この方は甲府城の歴史事実が否定されたり、発掘調査が否定されたり、県指定史跡としての価値が否定されたりするものではありません。

この「2つの事件」は、文化財の在り方をもう一度見直すきっかけを与えてくれたものであったかと思われまます。

それで下部町の文化財についてみますと、全国的に知られる国指定の文化財や県、町指定の文化財な

どたくさんあります（文化財一覧表「別掲」参照）。

特に国指定重要文化財である『門西家住宅』や、国指定史跡である『甲斐金山遺跡／黒川金山・中山金山』（湯之奥中山金山）は、国レベルで判断して重要な文化財ということです。したがって、重要だという認識がもてることと、その在り方や活用の方法を考える必要があります。湯之奥中山金山遺跡は、平成元年から3年間、下部町が「ふるさと創生事業」の一つとして、それまでにも多くの先生方が山に登り研究してきた、湯之奥金山の真の姿を解明したいということから総合調査が行われ、その実態が明らかになり、しかも、その成果が国指定史跡につながったものです。

日本における最初の産金は砂金で、陸奥国、現在の宮城県遠田郡涌谷町黄金迫（大貫鉱山）といわれています。東大寺大仏の鍍金に間に合ったということで和号も天平から天平勝宝に改められたといわれています。東大寺大仏の開眼が8世紀の天平勝宝4年（752）ですから、最初の産金は748年ということになります。

では、なぜ16世紀の黒川金山や中山金山が国の史跡になったのか、ということですが、両金山は砂金でなく山金（金鉱石から金を採る）採掘の日本における最初の金山ということが分かったためです。それは出土した石臼「挽き臼」などの鉱山道具で明らかになりました。鉱山道具の「挽き臼」（回転臼）は、鉱石を粉碎（粉成）するのに使われた道具で、砂金採掘では不必要な道具です。したがって「臼の存在＝鉱石から産金」ということで、砂金採掘に代わる新しい産金採掘技術が出現したことになります。砂金は金の状態で最初から発見されます。しかし鉱石から金を採るということは、金が入っている金鉱石を見つける知識が必要ですし、仮に分かっても、その鉱石から金を採る技術がないと金は採れません。湯之奥にはこの技術をもった「金山衆」が少なくと

も10人はいたとみられます。

この「湯之奥金山（中山・内山・茅小屋）」に残された「挽き臼」は、日本において一番古い形態をしていて、日本の産金技術史上、砂金から山金へと一つの画期があったということで重要な遺跡に指定されたわけです。

この湯之奥中山金山は、永禄11年（1568）の穴山信君文書で、中山金山の操業が確認されていますので、涌谷で砂金が採金されてから820年後、中山金山において日本で最初の山金採掘が始まったという歴史事実が下部町にはあります。

最近では、湯之奥（中山・内山・茅小屋）3金山から同じ初源的挽き臼が確認されていますので、下部町には日本で最初の山金採掘金山が複数あるという大変な『歴史遺産』が残されているわけです。しかし、その実態を知らずにいる町民の方がまだ多いようです。県外からの知名度は高まってきています。

この3金山の内容を全国へ発信している施設が

『甲斐黄金村・湯之奥金山博物館』で、日本の著名な金山史、鉱山技術史の研究者の大方は幾度となく来館されています。館と教育委員会主催の「公開講座」には、全国から著名な学者が講師として来館され、聴講者も県内外から参加し好評です。

この『歴史遺産』をどのように下部町の発展に生かしていくか、金山遺跡（砂金・山金）をもつ市町村が連携し『金山遺跡サミット』を下部温泉郷で開催することも一つの案として提案できます。

また、町民の皆様には湯之奥金山の実態を金山の現地や湯之奥金山博物館で実感していただき、16世紀の戦国時代に日本で最初に山金を採った「湯之奥金山」の自慢話をたくさんして頂き、下部町の知名度を高めてください。郷土を愛するには町の歴史をしっかりと知っていなければなりません、その学習の場が誰もが親しめる「湯之奥金山博物館」ということです。敷居は決して高くありませんので、気軽に遊びにきて学習して欲しいと願っています。

指定	種別	名称	所有者・管理者	所在地	指定年月日
国	建造物	門西家住宅	門西正勝	湯之奥255	昭和39年5月29日
国	史跡	甲斐金山遺跡 黒川金山・中山金山のうち中山金山	山梨県	湯之奥	平成9年9月2日
県	天然記念物	一色のニッケイ	依田和幸	一色4713	昭和36年12月7日
県	民俗文化財	木喰五行上人作の仏像及びその遺品	永寿庵・伊藤千恵子 山之神神社 小林一郎・岩松正治	丸畑	昭和43年12月12日
県	彫刻	瀬戸方外院如意輪観世音菩薩像	方外院	瀬戸135	平成2年6月28日
町	書跡	慈観寺一切経・輪転書架	慈観寺	道143	昭和44年4月1日
町	民俗文化財	長塩の獅子舞	長塩獅子舞保存会	北川字長塩	昭和45年4月1日
町	建造物	熊野権現神社本殿	下部区	下部	昭和48年4月1日
町	民俗文化財	熊野権現神社棟札等	下部区	下部	昭和48年4月1日
町	天然記念物	湯之奥群生ウラジロガシ	湯之奥区	湯之奥	昭和54年4月1日
町	天然記念物	一色のクスノキ	依田克己	一色3988	昭和54年4月1日
町	天然記念物	常葉諏訪神社大ケヤキ等	常葉区	常葉1124	昭和54年4月1日
町	天然記念物	長塩山神社境内社叢	長塩山神社氏子	北川字長塩	昭和54年4月1日
町	天然記念物	八坂のミズナラ	八坂区	八坂	昭和54年4月1日
町	民俗文化財	栃代若宮神社鱧口	栃代区	栃代	昭和54年4月1日
町	天然記念物	嶺の大ケヤキ等	岩崎真人	嶺147	昭和54年4月1日
町	民俗文化財	上折門道祖神	折門区	折門	昭和54年4月1日
町	民俗文化財	八坂金山神社諸商売役免許木札（鑑札）	八坂区	八坂	昭和54年4月1日
町	民俗文化財	石仏観音像	内藤清一	一色	昭和58年5月1日
町	天然記念物	常葉日光社大ケヤキ	常葉区	常葉877	昭和61年9月12日
町	民俗文化財	瀬戸方外院「千匹馬の大額」	方外院	瀬戸135	昭和61年9月12日
町	天然記念物	八坂のヨコグラノキ	八坂区	八坂	昭和63年2月9日
町	天然記念物	地蔵峠の大ツガ	折門区	折門	平成3年11月25日
町	民俗文化財	熊野大神社太々神楽	下部温泉神楽保存会	下部	平成3年11月25日
町	民俗文化財	セリイタ（ネコイタ）及び前木津（フネ）	門西正勝	湯之奥255	平成8年12月27日
町	民俗文化財	門西家所有穴山信友判物外165点	門西正勝	湯之奥255	平成9年3月27日

# 館からのお知らせ

## 1 運営委員会委員に赤池金作議長を委嘱

平成12年12月19日付けで、町議会の赤池金作議長が博物館運営委員会委員に委嘱されました。

これは、町議会の新構成により、小林茂男前議長が委員を退任されたため、その後任委員として委嘱されたものです。

運営委員会は、博物館の教育的機能の充実を図り、健全な運営方法や展示計画等について調査や研究等を行い、その内容を館長に提言するという任務を担っています。

現在の委員は、下表のとおりです。

職名	氏名	住所	選出区分
委員長	萩原三雄	甲府市	学識経験者
副委員長	伊藤 要	下部町	文化財審議会委員
委員	笹本正治	松本市	学識経験者
	十菱駿武	八王子市	学識経験者
	堀内 真	富士吉田市	学識経験者
	堀内 亨	富士吉田市	学識経験者
	赤池金作	下部町	町議会議員
	石部典生	下部町	学識経験者
	岩倉正行	下部町	学識経験者

## 2 公開講座の記録集を発刊します

当館は、開館以来幾つかの教育文化事業を実施してきましたが、特に、それぞれの分野における第一人者をお迎えしての公開講座は、県外からも受講者があるなど、広く浸透しています。

今般、講師の皆様方の御承諾と御協力により、平成10年度に実施した公開講座（講師4人）の講演内容をまとめ、記録集として発刊することになり準備を進めています。

詳細については次のとおりですが、御入用の向きにあっては、当館までお問い合わせください。

なお、平成9年度の記念講演と公開講座の講演内容をまとめた、金山史研究（第1集）（平成12年2月発行・1,200円）も発売中ですので、合

せて御利用ください。

◎書名 金山史研究（第2集）

—平成10年度公開講座の記録—

◎体裁 A4版100ページ

◎定価 1,200円

◎発売予定日 平成13年3月25日

◎掲載内容

日本の金山の歴史と菱刈金山

九州大学工学研究院・教授 井澤英二

石見银山遺跡の調査から

島根県大田市教育委員会・主任 遠藤浩巳

甲斐黒川金山と鉾山の考古学

東京大学大学院・教授 今村啓爾

佐渡金山と奉行所

新潟県相川町教育委員会・主任 斉藤本恭

## 3 FAX番号を変更しました

当館では、事務処理の効率化を図るため、FAX専用回線を新設しました。

新番号は次のとおりですのでご利用ください。

新FAX番号 0556-36-0003

なお、これまで使用していただいた36-0015は、電話専用回線となりました。

新電話番号 0556-36-0015

## 4 平成12年度最終回の公開講座を開催します

平成12年10月から5回にわたり開催してきました平成12年度公開講座の最終回を、次により開催しますので御聴講ください。

日時 平成13年2月17日(土) 午後2時

演題 生活の中の金貨…江戸時代の価値に迫る…

講師 千葉大学講師 加藤 貴

山梨県南部の天子山地は、毛無山(1964m)から南北に連なって、静岡県との県境をなしています。

毛無山山中には湯之奥3金山が存在し、尾根を挟んだ東側の同山中には、富士宮市の富士(麓)金山が存在します。

富士(麓)金山は、約1,500年前の新第三世紀の火山岩・泥岩に入り込んだ石英脈中から金鉱石などが産出し、湯之奥金山同様、かつての繁栄を見せた金山跡の一つです。

また、湯之奥金山と同じ鉱脈を東西から採掘した鉱山であるため、両金山は深い関わりをもっていたことと考えられる金山でもあります。

平成12年11月下旬、山梨県史編さん室の調査に便乗する形で、富士(麓)金山に分け入りました。

調査隊は10人ほどで、現地への案内役は地元の竹川家当主・竹川将樹氏に務めていただきました。

竹川家は、かつて富士(麓)金山金山衆としてその経営を担い、駿河の最大戦国大名・今川氏からの公文書を含め、中世から江戸にかけての古文書を多数所有しており、これらの文書は、「竹川家文書」として、その重要性や信憑性から、文献学者をはじめ、研究者の間でも高く評価されています。

また、富士(麓)金山が位置する毛無山の一部は、現在なお竹川家所有なのですが、山を所有して今に至る経緯については、こんな逸話が残されています。

『かつて徳川家康が鷹狩りに出かけたときに、休憩場所としたのが竹川家であったが、休憩場所を提供した褒美として、「何か欲しいものはないか」という家康の問いかけに、当時の当主は、「ここから見える山を全部もらいたい」と答えたところ、これに対して家康は、「承知したが富士山だけはやることはできない」と答えたという。』というような話をしながら、将樹氏は自分の庭のような感覚なのか、危なげなく案内してくれました。

さて、現地の状況ですが、まず現場に行く途中の足場が湯之奥/中山金山のそれとは違うということを挙げることができます。

同じ毛無山中にありながら、尾根を一つ隔てただけで、中山が土の道であるのに対して、富士(麓)

はその通る道のほとんどが角張った石を敷き詰めたような、まるで山全体が採鉱場のように見えました。

途中、川を渡り、標高1,200m付近まで来ると、次第に人為的な平坦面(テラス)が所々にあることが確認でき、また、小規模ではあるものの、石組の遺構がかなりの数で点在しており、中には、炭焼窯ではないかと推定できる石組もありました。

また、1300m付近にも、3つの横に並んだ炭焼窯と思われる石組もあり、随分しっかりとした作りで、そのうち1基は「窯出し口」らしき四角い間口が付いていました。

途中、3分の1くらい欠けた下臼を見つけましたが、擦り面は全体的に擦り減り、中心軸の周囲部分だけが盛り上がるような形をしているものの、はっきりと擦り跡は残されており、粉成作業に使用されたことが確認できます。しかしながら、下臼だけでは、果たしてその臼がどのタイプに分類できるかという点においては非常に困難を極めます。

湯之奥型の上臼が見つかれば、湯之奥金山との関わりを強固に裏付ける手がかりになることは間違いないのですが、残念ながら今回は上臼を発見することはできませんでした。



1,400m付近まで来ると、大きなテラスや石組がきれいな形で残っており、これは屋敷跡と目されていますが、もしそこに屋敷が建っていたとしたら、かなり大規模な建物であったと推定できます。こんなにも山深い場所にこれだけ大規模な石組が残っていることを目の当たりにすると、分かってはいても、この標高差200mの間に村が広がり、かつてここで

人が作業し、暮らしていたのだということを改めて実感し、驚きもします。

さらに1,500m付近まで進むと、幾つかの坑道を確認することができましたが、そのうちの一つは崩れていました。もう一つは人が中に入れる大きさのものでしたが、坑道の中は水が湧いているうえに全体的に足場が悪く、坑道内を観察できるほどのスペースもなかったため、確認するのみにとどめました。

今回の調査で確認できたことは、尾根付近に坑道跡が点在し、山腹には作業場などに利用されたテラス群が広がり、鉱石を焼いたという伝承をもつ石組(焼窯)もあり、鉱山技術を探るうえで非常に貴重な現場であるということです。

この遺跡が、今なおこれだけしっかり残っているのは、遺跡の山自体が個人の所有であり、その所有者である竹川家の人々が代々管理し、長年の間大切に見守り続けてきたことが幸いしています。

富士(麓)金山は、今川氏朱印状などの文献資料から、天文年間にはすでに操業されていたことが知られており、竹川氏をはじめ太田氏などの金山衆の存在も判明しています。

また、湯之奥金山に隣接した立地条件にあることから、間違いなく湯之奥金山と深い関わりがあったことが確認できる金山であるだけに、より一層調査の手を入れて欲しいと切望してやまない遺跡であることを再認識しました。(学芸員・小松美鈴)

## 活 動 報 告

### 1 公開講座

公開講座は当館の年間行事として恒例になりましたが、平成12年度は、「我が国の産金と金銀貨―湯之奥金山の産金と貨幣を考える―」というテーマのもと、昨年10月から5回にわたり開催しています。

本年度は、これまで開催してきた鉱山史、鉱山技術史のものとは少し視線を変えて、貨幣史という点から各先生方に講演していただいています。

本年度第1回目は、昨年10月21日に開催され、「近世：金貨の時代来たる」という演題のもと、白梅女子短期大学講師の西脇康先生にお話ししていただきました。

先生は、貨幣史シリーズ第1回目ということで、これから後に続く講演に先だって、銭貨の予備知識的なお話しをしてくださいました。

また、講演終盤には、聴講者に実物小判を手を取らせて見せてくれるという一幕もありました。

第2回目は、昨年11月18日に開催され、「江戸時代の黄金・貨幣観」という演題で、早稲田大学教授・深谷克己先生をお迎えしてお話ししていただきました。

金銀を巡って世界中に様々な物語が存在するなかで、史実や文献資料を読み解きながら、金や貨幣に対して、実際に人々はどのようなイメージを

抱いていたのかをお話しされました。

2000年最後の公開講座を飾ったのは、「甲州金から慶長小判へ」と題して講演していただいた、兵庫埋蔵銭調査会代表の永井久美男先生。

この講座は、平成12年12月16日に開催され、永井先生は、伝世資料による研究にはある程度の限界があり、逆に研究分析を進めるためには、その研究余地を有する出土資料が重要であること、また、貨幣は時代を映す鏡であり、貨幣がどのように発行され、どのように流通したのかを解明することによって見える歴史があることなどをお話しされました。



そして新年最初の講座は、1月20日に開催され、出土銭貨研究会顧問の尾上実先生から、「金銀銭貨の出土資料」という演題でお話ししていただきました。

これまで、日本各地の遺跡から出土、発見された金銀貨がどのように使用され、そして今現在にどのような意味を読み取ることができ、何を伝えるのかをお話しされました。

いくつかの事例を挙げながら、中世の世においては、貨幣を地中に埋めるといふ備蓄行為に呪術的意味が込められていたが、近世に入るとその呪術的意味は薄れてきてしまったということを知りやすく説明されました。

「貨幣」といふと、何となく身近に感じるせいか、構えることなくきくことが出来るのではないのでしょうか。

本年度の公開講座も残すところ1回となりましたが、そんな気軽な気持ちでお運びください。

## 2 運営委員会委員研修

1月12日、13日の両日、他施設における組織、運営方法、企画展や特別展立案の先進事例を学ぶため、運営委員会委員研修を実施しました。

今回の研修先は、静岡県金谷町お茶の郷博物館、

愛知県瀬戸市歴史民俗資料館、愛知県瀬戸市窯垣の小径資料館の3施設でした。

いずれの施設も、企画展、特別展を定期的に行い、住民サイドに立ち、地域産業の振興発展と地域活性化を目指して、関連団体や学校教育等との連絡協力を図りながらの諸活動には目を見張るものがありました。

特に、接客態度が館の命運をも握りかねないというお話しは、館に勤める者として改めて肝に命じなければならないものでした。



瀬戸市歴史民俗資料館で展示構成の説明を受ける

## 私の研究ノート④

### 湯之奥金山・富士(麓)金山の金山衆②

高岡伸五 (湯之奥金山博物館友の会会員)

私の研究ノート③(館だより第14号)で、湯之奥(中山・内山・茅小屋)金山と富士(麓)金山の金山衆の実像を追いかけました。ここでみられる金山衆は研究ノート②③を踏まえても駿河国旧富士郡の人たちということが濃厚になってまいりました。

この旧富士郡は第1図に示した富士宮市〔旧村名〕に相当しますが、天正2年(1574)に、この地域の人たち49人(14村)に武田家(勝頼)は「武田家普請役免許朱印状」を発給しています。

その時期を金山年表と対比してみますと、3年前の元龜2年(1571)に中山之金山衆拾人が武田家(信玄)から深沢城の参戦で功績を上げたということで、(甲州において)粉150俵を褒美にもらった頃、

また1年前の天正10年(1582)には信玄が病没、信玄から勝頼に領主が引き継がれた翌年にあたります。

恐らく城や陣屋に使う資材(葺板、材木)調達の普請役を嚴重に務めたことによる「武田家普請役免許状」ですが、合わせて軍用道路や生活物資確保のための道路を安全に確保するためにも必要な人たちであったのかもしれない。

49人の在所は第1表のとおりですが、それらの地名は第1図にある富士宮市の旧村の中にみられます。その村々へ人数を落としていきますと46人は確認できます。①上井出村3人、②白糸村22人、③上野村10人、④北山村11人です。街道筋に面した村々に居ることに意味があるのではないかと思います。

ところで湯之奥金山博物館に展示されている「志



